

バベルの塔

二〇一七年五月二十四日

バイブル・サービス

矢 口 洋 生

四月に東京都美術館で「バベルの塔」の絵画展示があり、機会を得て見に行ってきました。この絵は、現在のベ
ルギー出身の偉大な画家ブリュッセルが描いた絵です。日本での展示は二十数年ぶりとなる、美術の教科書にも出
てくる絵です。今日は「バベルの塔」に刺激を受けてお話ししたいと思います。

旧約聖書の「創世記」十一章を読んでみましょう。

世界中は同じ言葉を使って、同じように話していた。東の方から移動してきた人々は、シニアルの地に平野
を見つけ、そこに住み着いた。

彼らは、「れんがを作り、それをよく焼こう」と話し合った。石の代わりにれんがを、しっくりの代わりに
アスファルトを用いた。彼らは、「さあ、天まで届く塔のある町を建て、有名になろう。そして、全地に散ら
されることのないようにしよう」と言った。

主は降って来て、人の子らが建てた、塔のあるこの町を見て、言われた。

バベルの塔

「彼らは一つの民で、皆一つの言葉を話しているから、このようなことをし始めたのだ。これでは彼らが何を企てても、妨げることはできない。我々は降って行って、直ちに彼らの言葉を混乱させ、互いの言葉が聞き分けられぬようにしてしまおう。」

主は彼らをそこから全地に散らされたので、彼らはこの町の建設をやめた。こういうわけで、この町の名はバベルと呼ばれた。主がそこで全地の言葉を混乱（バラル）させ、また、主がそこから彼らを全地に散らされたからである。

ほんの十行ほどのお話で、これが絵画「バベルの塔」の源となるものです。短い、不思議な感じがするお話です。後半に出てくる「バベル」という単語は、「バラル」という言葉からきています。「混乱・ごちゃごちゃ・ごちゃ混ぜ」という意味です。バベルとバラル、これは聖書の中によく見られる言葉遊びです。

「バベルの塔」のお話から、いろいろなことを読み取ることができます。例えば、ここに言語の起源があるという説があります。つまり、言語の起源を説明しようとした物語だという解釈です。元々、人間は同じ言葉を使っていたけれど、何かのきっかけで言葉が混乱してバラバラになってしまった。その経緯を説明した物語というわけです。あるいは、これは人間のおごり、人間の愚かさについて書いたストーリーなのだという説もあります。もっとも、天まで届く塔を建てて有名になろうとすることに加えて、全地に散らされることのないようにしようという心情には、おごりに加えてと恐れも読み取ることができます。したがって人間の傲慢と小心、そしてその顛末を書いた物語なのだという説明です。さらには、バベルの塔は当時のテクノロジの象徴ですから、テクノロジの使用ならびにテクノロジー依存に陥った人間がたどる運命を描いたものと解釈することもできるでしょう。歴史

的興味から、これを原初のジグラートと理解することも可能でしょう。ジグラートは、世界史の教科書や資料集などに出てくる古代の高層建築物です。ジグラートに思いをはせ、想像力を膨らませ、その起源や衰退を描いたストーリーとして読むという可能性です。今日はそのような壮大な解釈をする代わりに、創世記を数章さかのぼりながら聖書自体の文脈、文章の流れに即してどのようなことを読み取れるのかを見てみたいと思います。最初に一〇章に触れ、さらに「ハムに対して」という文言を理解するために九章にも触れて解説をします。

まずは、物語の背景としての十章です。十章には複雑な系図が出ています。このような系図を見ると途中で読む気がなくなり、大抵の人は飛ばしてしまいます。しかし、系図にもいろいろと意義深い要素があるのでお付き合いください。これはノアという人の系図です。「ノアの箱舟」のノアです。箱舟を作って洪水を逃れたノアには三人の子どもがいて、その子供たちからたくさんの子孫が生まれました。その系図が十章に長々と書かれているのです。ノアの子どもが生まれた順序はセム、ハム、ヤフェトなのですが、なぜかこの系図では順番が逆になり、末のヤフェトの子孫が描かれています。次にハムの子孫のこと、最後にセムの子孫のことが長々と書かれています。

ここに重要なポイントがあります。旧約聖書の民、つまりユダヤ人はこの三人の子どものうち、セムの子孫と言われています。したがって聖書の初期の読み手は、自分たち（セムの子孫）の視点から他の民族がどのように映るのかを描いています。ヤフェトは海沿いの国々の元となったと書いてあり、そこにもいろいろな名前が出ています。セムの子孫と激しく敵対したわけではないようです。問題は二番目のハムなのです。ハムの箇所を見ると、聞いたことのある固有名詞が出てきます。バベル、エジプト、カナン、シリアという地名です。科学的分析をすると、ハムの系図はDNA的にはつながらない民族がひとまとめになっているので、それは生物学的系図よりもむしろ象徴的系図だということが判明します。つまり、ハムの子孫ということで名前が出ている国々は、その後、ユダヤ民

族のライバル、あるいは敵となった国々、宿敵なのです。そのような国がハムの子孫として理解され、列挙されているのです。ユダヤ民族は、ハムの子孫とされた国から攻められ、戦争をしかけられて散々な目に合います。同じ先祖を持つ（と理解されている）にもかかわらず、その子孫たちは戦いを繰り返したことになります。この流れの中にバベルの名前が出てくるのです。ハムの子どものまた子どもとしてクシュニという人が登場し、さらにクシュニからニムロドが生まれます。「ニムロドは地上で最初の勇士となった……。彼の王国の主な町は、バベル、ウルク、アッカドであり、それらは全部シナルの地にあった」と物語は続きます。ここから分かるのは、バベルという町はニムロドが建てた町であること、そのニムロドはハムの系図に含まれる人物だということです。ハムの一族とセムの一族はライバル関係にあったことを念頭に置くと、バベルの物語は、セム系のユダヤ民族によるハム批判の物語として読むことができます。

頻繁に戦争をしてハム系にユダヤ民族は負け続けたので、恨みをもったのかもしれませんが、それ以上のものがあります。バベルを打ち立てたニムロドは「勇士」として描かれますが、それは戦士・兵士 (Warrior) のことです。軍人と言い換えてもいいでしょう。軍人ニムロドが周りの土地を征服していく過程でできたのがバベルという町なのです。バベルは、ニムロドの町であり、軍都でもありました。つまり、バベルの塔を批判することの背景には、軍都の性格を持った町への批判があったと思われまます。

バビロン神話に出てくるマルドゥク神がニムロドのモデルだという説があります。それが正しければ、バベルはユダヤ民族の宗教と敵対する国の神を思い出させる町ともなるので、バベルの塔物語には、異教への批判の視点も含まれてくるでしょう。ニムロドの町で、塔がどのような役割を果たしたかはジグラートによって示唆されます。この塔のてっぺんで、人々は自分が信じる神に祈りを捧げたのです。つまり塔は、異教の神に祈りをささげる宗教施

設だったので。したがって軍の象徴、支配の象徴、異教の象徴としての顔をバベルの塔は兼ね備えるのです。このことから旧約聖書はバベルの塔に対して、批判的な視点を持っていることは間違いないと思います。

しかし、塔の物語を読み返してみるとハム系に対して批判的であるにもかかわらず、優しさも感じます。聖書は異教の都や異教の預言者、その軍隊を厳しく裁く物語を多く含んでいます。滅ぼしてしまうことも多々あります。しかし、この「バベルの塔」の場面ではそういったことが起こらず、ただ言葉がバラバラになってそれで終わりなのです。寛容な気がしませんか。では、どうして寛容の精神が描かれるのでしょうか。一つには、ハムがノアの息子だからです。つまり、ユダヤ民族にとって憎むべき宿敵と思われているハム系民族も、元を辿ればノアの息子だという理解です。本来、敵と思っている人たちが、実は先祖を共有する存在だということです。先祖が同じなら、接点があったくない、生まれながらの敵、コミュニケーション不能なモンスターではないのかもしれない。敵は、根源的敵ではないのかもしれない、という感覚がそこにはあるように思えます。寛容や優しさは言い過ぎかもしれませんが、少なくとも、敵に対する抑制的態度をここに垣間見ることができないでしょうか。

寛容についてもう一つ。創世記をさらに一章さかのぼって読むと、先祖ノアの話が出てきますが、ノアと神様は洪水の後に約束をしています。洪水によって地球の大部分が滅ぼされてしまった後、虹が出ます。その虹の前に神はノアと約束をします。「わたしは、わたしとあなたたちならびにすべての生き物、すべて肉なるものとの間に立てた契約を心に留める。水が洪水となって、肉なるものすべて滅ぼすことは決してしない」という約束です。腐敗した異神の軍都バベルは、神にとっては水の底に沈めてしまいたいほどの怒りの対象となっても不思議ではないのに、神は「全ての生きとし生けるものを滅ぼすことは決してしない」という約束を守ります。言葉をバラバラにする程度で留め置いた、というのは神の抑制なのかもしれません。

さて、絵画「バベルの塔」に触発されてそれに対応する聖書の箇所、ならびにその物語が登場する文脈を辿ってみました。多くの西洋絵画はその題材を聖書に求めています。文化や芸術を鑑賞するに当たって、聖書のことを少しでも知っていると理解が深まり、楽しみも倍増します。皆さんが本学で学んでいる間に聖書の教養を十分に身につけていただけることを期待します。そのことによって、皆さんも豊かな、芸術的な、文化的な感覚が磨かれ、人生をより深く味わうことができるようになるでしょう。

（本学学長）